ひかりのこ　栄光を神に帰す　1990年6月1日　第 31 号

光の子

発行／社会福祉法人 光の子どもの家
編集／光の子 編集委員会
〒349-11 北埼玉郡大利根町砂原277
TEL／0480－72－3883
振替／東京3－128022
印刷／(株)ドモン企画

ぼくはあひるがかり

一年　おおかわ　まさし

神に栄光を帰す（第二コリント・九・一三）

理事長　福島　勲

今年度の標語として、聖書から「神に栄光を帰す」を選んだ。

わたしどもの教会も（荻窪）いつの頃からか毎年標語を掲げて、年度の歩の指標としてきた。

しかし、はたして年間の標語がどれだけ生かされ、また意義づけられたか、その内容を問われては恥らわざるを得ない毎年である。

われわれ施設においてもまた同様であってはならないと思いながらペンを執っている。

受験生が必勝だとか、合格とか壁に貼り紙して励んでいる姿を思うにつけ、これらにも勝って、自らを律し、努める一句であってほしい。

エルサレムの教会には飢饉があったりして貧しく困窮にあえいでいる信徒が多かった。パウロはこれらの人々に対しての援助の献金をコリント教会に勧めている。

富めるもの、力ある者が、貧しく弱い者を援けるということは美しい愛の行為である。高ぶり誇り驕った心で、見下げ卑しみ、哀れんで施すことは厳に戒めなければならないが、愛の原点に立って共に苦しみ、重荷を負うことが望まれる。

コリントの人たちの愛の業として、献金をすることは、まさに神に栄を帰することであった。

宗教改革者カルヴァンの神学思想と実践の中心であり、坐右の銘であり、標語と思われるものは、この「神に栄光を」であった。

一六四六年英国で作られたウエストミンスター教理問答集の開巻第一問は「人の主な目的は何ですか」であり答は「神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことです」である。

われわれ人間すべては、神の栄光のために存在している。

栄光とは、ギリシャ、ヘブルの語では、優れていること、高貴なこと卓絶していることなどの意であり、神の栄光は神の臨

在の具象的な現象と解される。
現行聖書の「神に栄光を帰し」を共同訳では「神をほめたたえます」と訳している。
いずれにしても、かみの恵みを感謝し、ほめたたえ讃美することである。
讃美は告白であり、生ける主と共なる歩みから起こってくる。
ところでこの聖書をよく読んでみると、援助の献金するコリント人たちが神の栄光をあらわす、というようには書いていない。
献金を受けるエルサレムの信徒たちが「神に栄光を帰し・・言いつくせない賜物の故に神に感謝する・・」と書かれている。
われわれの施設も多くの人々の善意によって支えられ、整えられ励まされ、また慰められて次第に形をなしてきた。
これ一重にわれわれの力でなく、多くの人々と神の恵みの賜物であることを覚えて、神に感謝し、神をたたえ、栄光を神に帰せねばならない。
またこの真実な讃美の生活が、御言にかなう働きを生んでいくことと深く信じるものである。

この地域の子どもとして

施設長　今関　公雄

最近私たちにとって明るい出来事が二つありました。その一つは、子どもたちの学友がかなり頻繁に遊びに、或いは学習を一緒にするために来てくれるようになったことです。先日行った「第五回子ども祭」の音楽祭などがきっかけにもなったのでしょう。また、友人宅へ招かれたり伺ったりすることも目立つようになりました。開設以来五年の歳月を重ね、子どもたちが地域の子どもとして成長した結果であるとも思います。最年長が中学二年になり、それぞれ成長して、自転車利用などでの生活圏も拡大していきます。
もう一つは、地元大利根町に光の子どもの家後援会の誕生を見たことです。八五年夏、町を挙げての施設開設反対運動に思いを致すとき、まさに隔世の感があります。歳月の有り難さを感ずるとともに、職員たちが一丸となって進めてきた、子ども第一の家庭的養育実践が少しづつこの地で理解を得てきたとの自負にも似た思いもあります。
光の子どもの家の後援会の場合は、成立の経緯からも、地域における位置などきめ細かに考えておきたい。
人口約一万五千人の地縁血縁の濃密な、冠婚葬祭や農事作業などを柱にした人間関係による相互扶助、神社仏閣などの祭祀などによる文化、先祖代々から続いている暮らしの中での人間関係による同郷同族意識などが息づいている農村で、歓迎されないでやってきた子どもたちの生活圏が、義務教育の間はこの地域で一元化され、すべてが見通された状況下にあります。光の子どもの家の関係者は、この町の住民でありながら、ヨソ者として不断に違和感を感じる事実を無視できません。地域化（土着化）の困難性です。
そして、単なるヨソ者ではない社会的弱者としての私たちの存在です。社会福祉施設が持つ普遍的と言ってよい差別の根がここにあるのです。役に立たない厄介な者たちが、営々として築いてきた地域社会の中に入り込んで対等に生活していくときに出会う、自由や平等を根幹にする市民的生活の具現化の困難性です。
何よりも発足した後援会に期待するものは、特に子どもたちの最もよい時間である教育現場における偏見と差別の克服です。
地域的なトラブルは殆ど見られなくなりました。もし、あったとしても、共助の心が脈打つこの地域の人々と膝を合わせ、心を尽くして語り合えば解決にそれほど時間はかかりません。
しかし、集団の中に個人の良心や善意が埋没してしまう虞は、子どもはもちろん大人である教師でさえ希ではありません。
偏見は無知がもたらし、差別は偏見が生み出すと言われます。
私たちと地元の人々との交流の橋渡しと福祉思想の啓蒙を切に期待するものであります。
本誌読者や多くの人々には、引き続いてのご支援ご尽力を賜りますようお願い申し上げます。

エッセー

白ねこ誕生

県立高校教師　中島　睦雄

変形赤ドラ風三毛猫がいる。名前はチビラ。チビラの子は白猫のシロ。シロの子はやはり白猫のシロチビ。シロチビの子はシロチビチビ。直系の四代の猫が、今わが家に籍を置いている。籍を置いてはいるが、必ずしも同居はしていない。初代にあたるチビラは、シロと一緒に四匹の仔猫を産んだ。ある程度まで育て上げた後、シロだけが家に残り、三匹は他所へもらわれていった。チビラとシロの平和な母子は、しばらくの間、もっとも静かで幸いな日々を過ごしていた。しかし、シロが成長し、おなかが大きくなって、何匹かの仔猫を産んだあたりから、親のチビラは自然に、隣のアッチャンの家に移動してしまった。
シロにシロチビが産まれると、母親のチビラと同じように、シロも又、アッチャンの家に移動して行った。そして、同じように時々家に帰ってきては餌だけ食べて引き上げていく。
今度は、このシロチビがシロチビチビを産んだ。そしてシロチビチビが成長したこの春、シロチビは又、おなかを大きくして歩くようになった。
五月なかばの土曜の夜から、シロチビはお産に適した安全な場所を家の中で探し始めた。洋服ダンスの扉が半開きになっていると、そこへ入り込むし、そこを追い出されると、今度は部屋の隅に置いてある真っ白い羊の毛皮の上に身をかがめた。これはたまらないというので、手ごろな段ボールの箱を用意して、納戸に置いてやった。柔らかいボロを下に敷いて、箱へは一ケ所からだけ出入り出来る様にし、三方は段ボールのふたの部分を真っすぐに立ててやった。多分、お産をするシロチビが抱くであろう本能的な警戒心を和らげる為に、外敵を遮断する様な心理的効果を期待した。シロチビは素直にこの箱に入った。
翌朝まで別に何もなく過ぎた。シロチビは、箱から出たり入ったりしていた。ひとりで箱に入っているのが不安らしく、誰かそばに付いていないと、すぐ箱から出てしまう。
東のうちのおばあさんが、葉玉葱を持ってきてくれた。私たちは、シロチビのことをかまっている訳にも行かなくなり、玄関に出て行って、ひとくさり話をした。根に土の付いている取りたての葉玉葱を、さっそく食べようと言いながら台所へ帰ってくると、シロチビはまた箱から出てきてしまった。しかも驚いたことに、今度は半分産まれかかっている仔猫をぶら下げて歩いているのである。大あわてで箱に戻し、仔猫を引き出してやった。ドロリとした赤い塊が出てきたが、仔猫は何とか元気であった。
すべて難産であった。夜の十時頃、最終の五匹目が産まれたが、最初の一匹を残して、すべてダメであった。私は四つの小さな体を袋に入れて、夜のうちに埋めてやろうと外へ出た。しかし、夜中の暗がりの中で穴を掘っている自分を想像すると、いやになってしまい、やめてしまった。そこで、別な箱にいれて廊下の隅に置き、明朝埋めてやることにした。
翌朝私は女房に起こされた。「今朝、廊下の方でニャーニャー鳴き声が聞こえるから行ってみると、ゆうべ埋めちゃう筈だった仔猫が一匹だけ生きていたのよ。」と言うことであった。その仔猫はシロチビの箱に戻されて、二匹になっていた。娘も寝間着のまま起きていて、箱の中をのぞいていた。「ごめんね」と仔猫に言って涙ぐんでいた。女房も涙ぐんでいた。「あぶなかったね、でもね、このおじさんが悪いんだよ。」とふざけて私を指さした。神から与えられたこの小さな生命は、危ういところで葬り去られようとしていたのに、そんなことなど全く知らず、朝まで必死に頑張り続けていたのである。「ごめんね」と私も言いたかった。しかし私は言った。「困ったなあ、この猫はシロチビチビの後から生まれたんだから、シロチビチビチビと呼ぶことになるんかなあ」

現場から

四季を彩る

竹下　由香

《愛は、命の限り存続させようと日々地道に努力を重ねること》こんな言葉に出会うと「やっぱり努力かー」と呟いてしまうこの頃です。

チューリップがつぼみをつけはじめた頃、原田家にやってきた環君です。担当する子どもと新しい関係を創っていかなければならないという、期待よりは不安ばかりで押しつぶされそうな日々が続きました。そんな思いを持ったまま、ドタバタと環君との生活を始めました。もうすぐ4才の誕生日を迎えようとしているにしては、あまりにも幼い環君です。言葉も赤ちゃん言葉、基本的なことはほとんどできません。それでも日をおかず、何からどうすればいいのか分からず、不安に押しつぶされそうになっている私を、励ますかのように環君はどんどん色々な事が出来るようになっていきます。ずっと自分よりも大変なはずなのに頑張っている子どもを見ながら、落ち込んでいる場合ではないと思うのですが、なかなか子どもにはかないません。

やっと少しづつお友だちの名前を覚え始めた頃、入野兄弟の退所がありました。何となく、訳の分からないあわただしさの中、一緒に遊んだ虎獅君のおもちゃが片づけられていくのを不思議そうにみながら「虎獅君、どうした？」と聞く環君に、一瞬戸惑いながらも、「おうちに帰ったよ」と話します。くつをはきながら「環君も家に帰る」と言うので、「環君のお家は由香ちゃんと一緒のこのお家よ」と筋道の通らない説明をしました。すると「ちがう、おじいちゃんとおばあちゃんとパパのいるお家だよ」とはっきり言います。祖父母と一緒に生活したのは、たった2ケ月足らずです。しかしそこで、沢山の《愛》を獲得したのでしょう。環君にとってそんな心地よい愛に久しぶりに触れる事がありました。

遠くからかけつけた祖父母に手を引かれ、咲きそろったチューリップに迎えられて幼稚園への入園です。この日は朝から夕方まで祖父母の膝にいったり来たりしながらだっこされ、ニコニコと嬉しい嬉しい1日でした。

祖父母も入所以来の環君の嬉しそうな様子に眼を細めて、「しっかりしてきた、本当に良かった」と何度も繰り返し繰り返し言いながら喜んで、眼に涙を浮かべて「幼稚園にまで入れていただいて、本当にありがとうございました。」と何度も頭を下げては感謝していました。

涙を流して感謝する祖父母の様子に、環君をどんなに愛しておられたかその深さを思い知らされました。

そして、一体こんなに感謝されるほど自分は何をしたのでしょう。私は環君の成長に励まされながら、やっとの思いで環君についてきただけなのに・・。

祖父母の来訪によって、もっともっと環君を心から愛する努力を重ねて、家族の愛情に限りなく近づいていかなければ、感謝されるに値しないことだと励まされる思いがしました。

私はここで、もう三回目の春を迎えました。保母になって、ここに来ようと思ったとき、強い願いがありました。自分がそれまで両親、兄弟、友人たちなど沢山の人から受けたあふれるような愛情や友情、思いやりなどの幸いなことどもを、本当に必要な人々の誰かに分けてあげたいし、そうしなければ申し訳がないと思ったことです。

しかし、この二年間でそんな思いがとてつもない傲慢なことであることを知らされました。

子どもたちと一緒に暮らしを接すればするほど、愛することの難しさを感じないではいれないのです。愛することの意味さえ識らない自分でした。

そして、もう三年目に入りました。人を愛することの初めから見つけなければなりません。環君に、そして子どもたちと周りのすべての人々に教わりながら、地道に・・。

自分が受けて、その意味さえ分かっていなかったような愛と同じような質と量の愛を、環君や関わるすべての人々に・・。

★プリズム

原田家日記

四月二二日　渓子の誕生日

渓子の八才の誕生祝に、三月末でお家に帰った入野兄弟に招待状を一生懸命自分で書いた。狭いダイニングに座卓をいっぱいに並べ友だちを迎える準備。メニューはサンドウィッチ。「隆君たち来るといいな、来ないと寂しいな、絶対来てよ！」繰り返す渓子。いないと寂しい、いると嬉しい、楽しい。そんな当たり前の感情を、こんなに豊かに持つことが出来た。それは、二年余り前、この家に来た頃の渓子には空白の情緒だった。大事な人がいないことが当たり前だった日常からの脱出。やっぱり無理だったか、と寂しくあきらめかけた頃、窓の向こうにニヤッと隆、ニコッと虎獅、入野兄弟の顔ー仕事を終えた両親と。「お家はかわっても、みんな友だち」と大合唱して別れ三週間ぶりの再会。渓子への何よりの贈り物だった。

☆五月五日　子どもまつり

「のびのび、明るく、心身たくましく。」と望む成長の「より道」の多い原田家の長男、の悟があんなに生き生きと進んで練習した。細かい音符を前に曲の見当も付かない数日前。「勉強の時と悟君の顔が違うんですよ」と、学習も、この曲も教えて下さる由布子先生も感心。まとまった力強いメロディ。「頑張れ！」と下がり気味の悟の背中を押し出す、そんな曲だ。「できたー」この自信を次へ！。

☆　五月十二日　遠足

「東山さん」と呼ばれ「お子さんは何人？」と聞かれたことも。幼稚園では東山福子の母と思われ、それでずっと通せたら職員だと言わなくていい。次第に「光の子どもの家の職員」の顔と知られていく現実。遠足のこの日ばかりは「お母さん」で過ごした。誰よりも福子自身がそうでない事を知っている。母の日を明日に「お母さん」という存在を明らかに出来ない現実の重さを感じつつ、しっかり根を下ろし育っていく。その強さに支えられている。竹花信恵。

★プリズム

まなざし……

佐藤家の玄関のげた箱の上には水槽があって小さな魚が気持ちよさそうに泳いでいます。運動会の金魚すくいで捕ってきた和金や、近くの小川でつかまえてきた小魚です。六年生の逸郎が毎朝タミジンコなどをあげたり、水を足してやるなど世話をしています。それでも、重い水槽を動かして水を替えてやるのも一苦労なので、横着者の坂巻さんに、ついついそのままに放っておかれ、ときには、麦茶のような水の中で魚たちは迷惑そうな顔をしています。

家の裏にはコロの住み家があります。コロはこの三月から佐藤家の一員になった可愛らしい雄の仔犬です。ちょっと太っていてコロンコロンしているので櫂也がコロと名付けて、朝夕の食事や糞の始末、夕方には近くの神社まで散歩に連れて走ります。寄り道したがるコロを引っ張ったりし、途中の草原で寝転がって遊び戯れる櫂也はとても楽しそうで、コロもご機嫌です。この頃ではコロも大きくなってきてしばらくすると櫂也が引かれるようになることでしょう。

春には梅、コブシ、花ミズキ、チューリップ、桜、秋にはコスモス、紅葉が園庭を彩り、今は、さつきの華やかな光のなかをあひるのガアガア声がにぎやかに流れます。

人が生きていくのに、取りあえず人数分の食料と、寝る場所があれば生命を維持できます。机や椅子、茶碗に箸、暖房等々。機能的にいくら満たされてもそれだけで十分ではないのです。犬がいて、花びらが舞い、美しい夕日に染まり、涼やかな風が流れて、その中に子どもたちの笑顔や泣き声がある、そんな〈普通〉の風景が私たちは好きです。

今、家の裏の小さな空き地に、滋と鷹文が一輪車で土を運んで畑を作っています。「ナスがいいな。」「ぼくはトマトのほうがいいよ。」とにぎやかです。蝉の声が騒がしくなる頃には、自慢の野菜が食卓に上り、得意そうな顔、顔が並ぶことでしょう。石毛照子。

★プリズム
子どもたちの季節

仙道家に詩美ちゃんやって来たのは三月末のよく晴れた日でした。堅い表情でムッと口を閉じたしかめっ面が印象的でした。ところが、たくましそうな外見とは反対に、繊細で優しい女の子であることを、日を追って鮮やかに見せてきます。よくあることですが、繊細で優しいために人となじむのが大変なようでした。側に寄られたり、触られたりするのを嫌がり、待っていた子どもたちは、戸惑うばかりでした。詩美ちゃんには、ここに来る前にいた乳児園へまり子さんと一緒に面会に行ったりしていた、五才のお姉さんを仲介にしながら、大人よりも寛容に受け入れてくれ、芸達者な子どもたちに、不安で硬く閉じていた心を刺激され、ほぐされ、柔らかで豊かな表情になっていきました。二才児ならではのかわいいしぐさや、じっと考えているような知的な雰囲気で、今やスーパーアイドルです。

そんな子どもたちより少し遅れて、私の名前を初めて呼んでくれたときの、あの瞬間は決して忘れません。

私は詩美ちゃんより少し前に仙道家に来ていたのですが、こんな幼い子どもと生活するのは初めての経験です。たくさんの人たちの中から選ばれたのは最初は得意でしたが、最初からここを創ってこられた先輩と交じって、私も詩美ちゃんと同じくらいか、それよりもっとでしょう、だんだん不安で心細くなってきていてました。

そんな私にとって、詩美ちゃんは何よりの励ましであり、プレゼントでした。詩美ちゃんの雰囲気は仙道家の隅々までいきわたり、みんなを巻き込み、空気になっていきます。人が加わることの豊かさを、楽しさを、素敵に教えてくれました。

限られた空間と、力と、時間と、手間と・・。そんな中に人が加わったら分け前が、領分が少なくなって貧しくなると考えるでしょう。でも、そうではないことを詩美ちゃんは実に鮮やかに示してくれました。私にもそうするようにと・・。

五来淑子

養護メモ28

自立
入野　隆の場合　その九

菅原　哲男

隆の母蕗子の中学時代は少しづつ上向いてきた経済状態もあって、学校を休んでまで手伝うことも次第になくなってきた。それにつれて、身につけられたどんなことでも自分ですることや、負けじ魂は学年でも目立つような行動力や学力となって表現されるようになったと言う。

地元の県立高校を卒業して結構競争のあった保険会社に就職して勤務成績もよく、職場や地域に信頼しあえる友人もあった。

薩夫との結婚を友人などに告げると、「あの人！」「なぜ？」と一様に驚かれたと話した。

薩夫によると、十代で結婚を両親に告げ、まだ若いと反対されたが押し切ったと言う。

自立した女性と、両親との間に幼児性を克服できないでいる男性との早い結婚には、多くの危険に満ちていた。特に祖母と蕗子の関係が陰険な形でこじれもつれていった。

自力で一家を成し、小さいながらも事業を起こしたという自負や誇りを持っている祖父母と自分の人生を切り開いて自立してきた自信に満ちた蕗子。

それが、互いに譲り、許し、謝れず、間断なく疑い、非難、攻撃し憎悪が肥大していった。

運転免許を持つ蕗子は、会社に勤める傍ら家業の運送を手伝った。育児や家事は殆ど姑に任せていたが、祖母に嫁がきてからガスや電気の使いが激しいと言われ、会社の帰りに実家に寄り風呂に入って帰ったと言い、祖父母の育児はとても承服できなかったと言う。

病気で寝た数日間、一度も食事を作ってもらえず、飢えて隣町に嫁いでいる自分の妹に電話してやっと一命をつないだと祖母が訴えた。などなど、言い分や訴えは枚挙にいとまがない。

祖父母は、薩夫を育てた通りにか、それ以上に孫を甘やかし、欲しいだろうと思う事や物を与えることで同一化しようとした。

蕗子は自分流に育てたいと思いながらも会社や家業などで、祖母の世話にならなければならず、祖母の世話にはなりたくない意地との間に屈折した葛藤があった。家では何もしない我がままな暴君で学校時代の力関係や生活力や表現などでは蕗子に及ばない薩夫は、他の女性とつき合い出す始末であった。

離婚までには、実家が地縁血縁が主な人間関係を形成している同じ市内だった事で想像を超えた絶望的な経過をたどった。

派手な怒鳴り声や殴り合いがしばしばで、祖父の兄の仲裁も希ではなかったと近所の人たちは証言する。

薩夫が家族間の問題から逃避し、隆の弟が生まれて間もなく、他に女性と関係を持ち、同棲に至ったのは偶然ではなかったと思われる。

そして、離婚によって、入所となったものである。

入野兄弟の入所の頃は、人や物を殴る蹴る、障子や襖などを破り散らすなどが主な表現であったことが一ヶ月以上にわたって記録され、そんな直接的で乱暴な表現と、欲しいものでも「いらない！」したいことも「いやだ！」と拒否して試してからでないと自分の要求を受け入れることが出来ない屈折した表現とが錯綜している。

このことは、生まれて以来、本来の親子関係の経験に乏しく、母子関係について言えば母親がいても母親の役割が果たされていない、いわゆる母親剝奪（マターナル・デブリベーション）の状態が続き、父親もいるときは父親自身が幼児的な上、殆ど不在で、子どもたちの養育の役割を果たせなかったことから、親子を核にした家族関係の混乱が強く影響したものと思える。

隆たちの救いは、保育園でのケアーと友だち関係であった。二～三才頃から近所の友だちと暗くなるまで遊び、時には夕食を頂いたり、迎えに行くまで帰らなかったと言う。このことが子どもらしい感性や情緒や知能などが刺激され、回復され、養われ補われた事などが伺える。

大人たちにしてみれば子育てどころではなかったのだろう。

私たちは、求められれば、雨の降る中を傘をさしてザリガニを取りにいったり、夜、寝つけなくて外にいきたいなど、隆の要求や試みを可能な限り受け入れ、破った障子を一緒に修理したり、出来るだけ抱いて凍てついた心を暖め、何よりも極端に乏しい人間関係への信頼や人に愛されることを、主に担当者の関わりで経験させ、まず安心して生活させることで心身を安定させ、それを基本にした人間関係や生活訓練、自立へと図った。

入所の頃、同棲していた人は、蕗子が去った家で生活を始め、薩夫と正式に結婚して隆たちの母になると、薩夫と挨拶に訪れた。老いた祖母の世話をし、家業を手伝い祖父母との関係も良く、子どもたちに遠足のお弁当を作って届けてくれたりした。

再婚し、引き取りを予想したが、入籍などされないで数カ月が過ぎた。当然、子どもとの直接的な関わりは控えてもらっていた。

その頃、蕗子との復縁を薩夫は強く求めていたのだった。

関係の拒絶を宣言していた蕗子が、学校の帰りに隆と会って抱き上げているところを、通りかかった祖父に見つかったことで事態は新しい展開をしていく。

祖父母宅、蕗子と薩夫の同居先を訪ね話し合いを重ねる。特に利害やこれまでの経過でこじれてしまっている祖父母と実家を含めた蕗子の関係の調整は困難を極めた。十数回に及ぶ調整の末、翌年の春、ようやく祖父母が復縁は認めた。薩夫・蕗子も再婚、引き取りを合意した。

この間、隆の状態は激しく動揺し学校での拒否的な言動となって表現されていった。

忘れ物だけはさせないで教室での位置を確かにしたいと考えて担当がとりくみ、隆のおかれている状況も担任教師に伝え、協力を求めた。しかし、持っていった提出物を何日も机の中を改めることさえしてくれない、学校で喧嘩している何とかして欲しい、こんなにグチャグッチャですと教室の机を見に来て、など電話をしてくる担任教師に、隆を受け入れて何とか取り組んで下さっている様子が確認できず、家に帰るための準備の協力の要請も含め話合いを求めたのは八七年初冬であった。続く。

日誌抄

三月二一日～四月三〇日

三月二一日　春分の日。この月でお家に帰る子どもが原田家に二人仙道家に二人。お別れの意味を含めて原田家は古河総合公園、仙道家は那須高原へお出かけ。

二三日　幼稚園卒園式。三名が二年間お世話になって卒園しました。先生方の献身的なとりくみに感謝します。

二四日　小学校卒業式。小学校半ばからここにきて始めた学習。引き上げ押し出し、励まして頂いた先生方に感謝。

二六日　四年生の加津子斜視の手術のため県立小児医療センターに入院。二九日退院。

二六日　渥美詩美（二才三ケ月）入所。姉の悠子が待つ仙道家、岩崎保母担当。皆で歓迎。

○越谷市の岡田様日用品を。

三〇日　「今年度も頑張った会」年度始めの目標を全員が突破して、新たな年度に備える。

○江戸川区の篠原氏より乗用車のご寄贈。感謝。

三一日　塩野姉妹（三年生、一年生）が四年半、入野兄弟（一年生、四才）が約二年の大健闘の生活を終えて、今度こそ家族みんなでの、幸せを！と祈られて家庭引き取り。

○第二二回理事会。一九九〇年度事業計画、予算などを承認。

○大変な時期を助け、地道な働きの五木田供三氏退職。

四月二日　原道小学校の藤田昇一新校長ご挨拶に来訪。

○江森理容店主の散髪ご奉仕。

六日　二名が家に帰った虹の会に新一年生三名を歓迎する例会を湯の郷で、楽しく。

○入進学祝い、今年も頑張ろう会を新しいランドセルや制服を身につけて決意表明や歌などで楽しく、そして緊張も。

七日　剣友会入講式。

八日　浦和の鈴木さん植木を。

九日　小学校へ三名、中学校へ二名、入学式。頑張るぞ！

十日　幼稚園入園式、進級式。環も福子もよろしく。

○待望の光の子どもの家大利根町後援会第一回準備会開催。

十一日　善プランテーションより三つ葉をたくさん。感謝。

十二日　佐藤運送よりチョコレートをたくさん。ありがとう。

十三日　栗原忠氏いつものお励まし。ありがとうございます。

十五日　浦和の利根川氏より日用品をたくさん。感謝。

十六日　向後氏よりバナナを。

十七日　町内旗井の山口氏よりたくさんの本を。感謝。

二十日　町内島田氏より日用品をたくさん。感謝。

二一日　英国大使館のご招待で、英国海軍軍艦ブリストルに。幹部候補生の熱いもてなしと戦争のない世界について考える機会に。英語の不案内な職員が大汗も。ありがとう！

二五日　町内大竹氏よりタオルなどの日用品をたくさん。

二九日・三〇日　この連休を第五回こどもまつりにむけて、懸命の練習と準備を。

三〇日　江森理容店主の散髪ご奉仕。淡々と・・。感謝。

○青山学院大学キリスト教学生会十七名が。子どもたちと遊び整地作業に汗をながして一日を。ありがとう。

おかげさまで、この年度もこのように始まりました。これからが正念場。励みます。（くら）

反射光

空梅雨といわれて少し天気が崩れると紫陽花が色をきわめ園庭の草木の息づかいまで聞こえそうです☆間隔が不規則になり、激しい仕事に追いまくられて途絶えそうにもなりましたが、支えられていることへの唯一のご報告として五年間で三〇号を発行することが出来ました。この間のご協力お励ましに心から感謝し、もう五年を目当てに拙ない私たちの働きの報告を中心に続けたいと編集委員一同決意を新たにしております。変わらぬお支えやお叱りなどお願い致します☆引き続き中島先生のご協力でエッセイをしばらく掲載しますご期待下さい☆今号からプリズム欄で私たちが最も大切にしている三軒の家の様子などをお伝えします、併せてお目通し願います☆皆さまのご意見やご感想なども是非頂いて紙面を豊かにしたいと願っています☆先頃始まった年度がもう三分の一の終わりが見えてきて、楽しい美しい思い出の夏休みのための準備を総力を挙げて始めました。ご支援を！心から（哲）